

研究テーマ：意欲的に取り組むことができ、学習したことが定着していく授業の改善

所属 高知市立潮江中学校

氏名 立仙暁子

R G J H 3

1 研究の背景

対象は潮江中学校2年生4クラス136名の生徒である。1年生の時から受け持っている学年で、生徒とのつながりもできており、また今年度はT T（但しT 2は免許外）で教えているので、授業自体はやりやすい環境にある。しかし学力的には高いとはいえず、週3時間という限られた時間内では教科書をていねいに教えるのが精一杯という現状がある。

2年生になってライティングや音読に力を入れてやっている。ライティングは多く生徒に書こうとする意欲が見られ、音読のテストでは読みを苦手とする生徒でもそのページは読めるようになるまで練習をしてテストに臨んでいた。

しかし、そうやって授業の中でいろいろな活動をしていても、定期テストの平均が50点以下になることが多く、きちんと理解していなかったり十分に身につけていないことがわかる。特に20点以下の生徒が全体の約15%おり、結局英語は難しい、わからないと感じている生徒が多い。

2 リサーチクエスト

英語が苦手な生徒でも意欲的に取り組むことができ、定期テストの平均点が60点以上になるようにするにはどのような指導をすればよいか。

3 予備調査

定期テストの結果

	1組	2組	3組	4組	全体
1学期中間	46.7	52.5	44.9	43.3	46.9
1学期期末	48.3	52.4	44.8	45.1	47.7

4 仮説の設定

仮説1 毎時間5問ずつ単語の復習をしていけば、必修の単語の定着に役立つだろう。

仮説2 身近な題材を使ってターゲットセンテンスを説明したり、自己表現活動を多くすれば、興味を持って主体的に活動に取り組むことができるだろう。

仮説3 定期的に音読テストや暗誦テストを行って評価をすれば、単語や文が読めるようになり、自信を持ってスピーキング活動に参加できるようになるだろう。

仮説4 合格点を設定して、各单元ごとに基本文の確認テストをすれば、言語の知識理解の定着につながっていくだろう。

5 計画の実践

仮説1 2学期に入って授業のはじめに1学期に習った単語を中心につづりを書くテストを行った。書けなかった単語はテストの余白に3回以上書いてその時間内に覚えるよう指示した。

仮説2 ターゲットセンテンスの説明の後、可能な限り自分のことを英語で書かせるようにした。

例) I am very happy when _____.

I like (季節) because _____.

(動名詞を使って) _____ is fun.

仮説3 教科書 p.36,37「夏休みの思い出」を参考に原稿を作り、教室の前でスピーチ発表を行った。

教科書 p.44,45「道案内」では、ペアで郵便局へ行く道と図書館へ行く道を尋ねたり答えたりするスピーキングテストを行った。

仮説 4 やれていない。

6 実践の結果

仮説 1 英語の苦手な生徒でも取り組む姿勢が見られた。ただ続けていくうちに単調になり、パズルやしりとりのような工夫が必要になった。

仮説 2 生徒たちが自分の文を書くのが好きだというのがよく分かった。習っていない単語を使ってでも書きたいと思っていることを書くほうが積極的に取り組めるようだった。

仮説 3 スピーチ発表については、やはり人前で英語を話すのは苦手と感じた生徒もいるが、お互いに評価をしながらまじめに取り組むことができた。スピーキングテストは、ほとんどの生徒がよく練習をして暗誦できており（77%の生徒がAの評価）、英会話を楽しむ様子が伺えた。

7 結果の検証

2学期末にアンケート調査を行った。仮説の実践に関連する部分は以下のとおりである。

	楽しくなかった。 役に立たなかった。		ふつう		楽しかった。 役に立った。
単語テスト	4	3	48	23	22
スピーチ発表	10	15	43	16	16
スピーキングテスト	1	6	27	32	34

定期テストの結果

	1組	2組	3組	4組	全体
2学期中間	52.5	49.4	43.9	48.1	48.4
2学期期末	59.8	58.7	51.4	54.4	56.1

記述式のアンケートで「単語が覚えれるようになった、書けるようになった」と書いている生徒が58人（40%）おり、単語テストだけの成果ではないと思うが、単語を覚える力が身につけてきていると感じた。

2学期は助動詞、接続詞、動名詞など新しい文法事項が増えた分、自己表現の幅が広がって書こうとする意欲が見られ、またなかまの文を聞くことなどに興味を示す生徒も多かった。

また、記述式のアンケートに「英語が話せるようになった」「英語を話すのが楽しくなった」というのもあり、スピーキング活動を通して自信を持たせることが可能だということも分かった。

しかしながら、今回のアクションリサーチの目標が達成できなかった一番の原因は、仮説4に取り組むことができなかったことである。時間がなかったということは、自分の指導の計画が不十分だったということに尽きる。

8 成果と今後の課題

今回このアクションリサーチに取り組んでみて、「何とか定期テストの平均点を上げなければ」というプレッシャーが常にあった。英語学習の狙いはテストの点数にあるわけではないが、実際に生徒たちはテストの点数で自分の英語力を確認し、教える側もそれを評価の資料や指導の参考にしているのは紛れもない事実である。結局は目標点に達することができず自分の実践の不十分さを反省するしかないが、それでも1学期の中間テストのときと比べて最終的には10点平均点が上がったことには着目したい。その裏づけになると思えるのが、日々の授業に意欲的に取り組む生徒が増えていることである。記述式のアンケートでも「ができるようになった」と書いた生徒が多く、授業以外でも課題学習プリントやテスト勉強などの自主的な学習に取り組め出したことは、今後の学習成果にも期待が持てそうである。

ただし、今回の取り組みでも、英語を苦手と感じテストでも20点以下の生徒の人数はほとんど変わっていない。全体指導の中でのそういった生徒たちへのフォローに限界を感じているが、アンケートからはみんなと同じ活動をしながら英語が分かるようになりたいという切実な気持ちが読み取られ、まだまだ大きな課題に取り組まなければならないと実感した。

これからも全員に分かる授業、分かったことが定着していく活動を研究しながら、授業改善に取り組んでいきたいと思う。